

宮崎県人のアイデンティティ

園長 児嶋 草次郎

この水がわれを育てしなるらんか鋼（はがね）のごとき今日の黒潮 伊藤一彦

次郎 僕は夏休みの自由研究で、西都原古墳群のことを調べたいんです。古墳群と言っても、古墳だけに興味があるわけではなく、あの古墳群の東側の一段下にある、コノハナサクヤヒメとニニギノミコトが出会って結婚して、コノハナサクヤヒメが出産した所とか産湯として使った「児湯の池」とかとの関係が全然わからないので、それを調べたいと思いました。西都原考古博物館に行っても、コノハナサクヤヒメとか載っている「神々の系図」と書かれた紙は置いてあるけど、古墳群との関係については、全然説明してありません。教えてもらえませんか。

先生 いい所に気付いたね。園でも 10K ハイキングで西都原古墳群に行く時、「児湯郡」の名前の由来の場所である「児湯の地」のあたりを散策したりしているよね。だけど、職員たちも子供たちも、古墳群と神話とがどうつながっているのか話題にもしないよね。

まず古墳の話は、3世紀末頃から7世紀初め頃の話なんだ。それに比べてコノハナサクヤヒメの話は、日本の歴史をまとめようとした「古事記」（712年）、「日本書紀」（720年）に出てくる話で、一つの伝説、神話なんだ。日本に文字が入って来たのが5世紀頃ではないかと言われているけどコノハナサクヤヒメから神武天皇の話は、それよりもっともっと古い話で、文字もないし証明のしようがないのだ。

次郎 全然時代が違うんですね。へえ、ぼくにとっては新しい発見です。聞く勇気もなかったけど、コノハナサクヤヒメのお墓ってどれなのだろうと思ったりしていたのでー。

それにしても、文字のない時代って、どうやって伝説とか神話とかは伝えられていくのですか。

先生 記憶力抜群の人を捜し出して、その人にすべてを記憶してもらうんだ。

次郎 すごい。そういう人が当時いたんだ。

先生 高天原（天）から日向国高千穂に天照大神（アマテラスオオミカミ）の命をうけて、ニニギノミコトが下りてこられたという天孫降臨の話が「古事記」・「日本書紀」には書いてあるのだけど、その後の天皇の系図をさかのぼるとコノハナサクヤヒメは紀元前の話になりそうなんだ。だとすると、何百年間もその伝説・神話を伝えるためには、何代にも渡って記憶し続けなければならない。

「伝言ゲーム」というのをレクレーションでする時があるよね。短い文章でもなかなか正確に伝わらないよね。長い長い伝説や神話を伝えていくというのは、大変なことだったと思うよ。その時々々の政治状況や記憶する人の思い・感情で誇張されたり、肉付けされたり削られたりすることはあるだろうね。100%正確に伝えられているとは思わない方がよいよね。

次郎 ずっとずっと昔に天孫降臨の神話があって、その後に古墳時代に入っていくんですね。初代天皇である神武天皇が宮崎から出ていると聞いていますが、こちらはいつ頃の話なんですか。

先生 考古学者や歴史学者に言わせると、天孫降臨の話も神武天皇の話もその存在を科学的に証明できないので、作り話だということになるようだ。しかし私たちは、天孫降臨の地宮崎に住んでいるし、目と鼻の先にその伝承地もある。証明できないかもしれないけど、否定する材料もない。このような神話を自分自身の心の中にどう整理するかというのは、自分の人格を作るにおいて重要な課題だと思う。私自身もまだ整理できたとは言えないけど、せつかくの機会だから、言わば「日向神話と宮崎」について簡単に話してあげよう。天からこの地を見下すような気分で、イメージを最大限にふくらませて聞いてほしい。

次郎 ありがとうございます。その話をまとめて夏休みの自由研究にします。

先生 まずずっとずっと古い所から。現在の人類が出現したのは、今から 20 万年～10 万年前、アフリカ大陸だそうです。6 万年前頃にアフリカを出て世界各地に広がっていった。日本列島に到達するのは 4 万年前くらいだとか。その頃まだ氷河期が終っておらず、今より海水面は 100m くらい低かったそうだ。だから、大陸から日本列島にも渡りやすかっただろうね。ずっと時代が下って、縄文時代に入るのは、今から 16000 年くらい前。縄文時代は 13000 年以上続いたそうだ。有名な遺跡が青森県の三内丸山遺跡。ここは 1600 年間も続いたというから当時世の中は平和だったんだろうね。その後の人類の歴史は戦争の歴史と言ってもよいくらいだからね。縄文土器、土偶が有名だよ。丸太をくりぬいた丸木舟もあり、この日本列島のアチコチと交流し合っていたようだ。自然環境も徐々に温暖期に移行し、海面も上昇、6000～5500 年前頃には、逆に現在のより数メートル高くなった時もあったそうだ。これを縄文海進と言う。

先ほど平和だったと言ったけど、この縄文時代には戦争の跡がほとんど見られないそうなんだ。豊富な山海の幸に恵まれ、この大自然ともしっかり共生し合えていて、互いに争う必要がなかったんだろうね。今の日本人の自然観（共生）や和をおもんじる感性の土台は、この時代に作られたと言われている。自然物それぞれに神が宿るという発想もそうだろうね。

次郎 わあ、アフリカから話が始まるなんて、地球規模になった。

先生 そうなんだ。天孫降臨の話も、日本列島だけで考えようとしたら、説明できない。今の時代に、天からニニギノミコトが降臨、つまり下りて来られたと言っても、だれも信じないよね。次郎は信じるかい？

次郎 いえ信じません。

先生 次の話に移ろう。縄文時代の次が弥生時代だよ。3000 年前から 3 世紀初頭頃まで 1200 年間を言う。天孫降臨の話もコノハナサクヤヒメの話も、この時代の出来事だろうと言われている。

まず、稲作が始まったのは中国長江中下流域で、9500 年前。それが日本に伝わったのは、3000 年くらい前、まず北部九州に伝わりそれが紀元前 2 世紀頃までには日本列島全域に広まっていったと言われている。ここで立ち止まって考えてみなければならない。どのようなやり方で稲作を当時の中国人たちが縄文人に伝えたのかということ。

次郎 今と全く時代が違うし、イメージできません。

先生 中国の歴史の年表を見ると、紀元前 1500 年頃殷王朝がおこり、その後周となる。その後半ば春秋・戦国時代と言って 500 年間に渡って長い戦乱の時代が続くんだ。「下剋上」とか言うけど、あの広い中国大陸で様々な国同士が争う弱肉強食の世の中になってしまった。戦いに負けた国や豪族は、一族郎党すべて殺される。何百年も戦いが続くということは、敗北して殺された人々もそれだけ多いということ。しかし、その中には、命を長らえようと中国大陸から船で逃げ出した一族も少なからずいただろう。長江から船に乗って海に出れば海流に乗って、自然に日本列島

にたどりつく。そういう一族が金属性の武器はもちろんのこと、生活・農用具一式全て持ちこむ。その中に稲作りの技術も含まれる。そういう人たちのことを渡来系弥生人という。日本はまだ狩猟漁労採集の縄文文化の中でのんびり生活していたわけだから突然の登場にびっくりしただろうと思う。

さっきも言ったように縄文時代は、戦争のない平和で豊かな時代。そこに戦闘服の異国人たちが一族で突然に逃れてくる。この時の状況を描いているのが、天孫降臨だと言う人が多い。

次郎 なるほど、中国大陸から渡って来た人たちの話なのですね。

先生 そういふことは、この歴史の中で、日本列島各地で度々あったと思うよ。中国大陸の方から見ると日本列島はちょうど孤を描くように海に位置して待ち構えている。見方によっては、母親が手を広げて待っているように見える。高鍋藩の藩主であった秋月家は福岡の方から来ているけど、もともとは、後漢の時代に逃れて来た一族であったようだし、この木城町にも、唐・新羅に破れ日本に逃れて来た百済（くだら）王族の悲しい物語が残っているよね。

中国大陸から多くの避難豪族・王族たちが日本列島に次々に渡ってくるようになり、各地の豪族と最初は少々トラブルになっただろうけど、新しい農耕技術も持っているし次第に融和して、稲作も定着していく。しかし稲作が定着し農耕社会になると、富も蓄積されるようになり貧困の差が生じて争いが始まる。中国の歴史と同じ道を日本列島も歩み始める。そうになると、自分たちを守るために、周囲に壕や柵をめぐらし環濠集落が次々に生まれ、互いに水田や富の奪い合いも始まる。その頃の史跡で有名なのが、佐賀県の吉野ヶ里遺跡だね。紀元前4世紀頃からのもので、環濠集落内だけでも1200人くらいの人たちが住んでいたそう。

次郎 その頃のことを、だいたいイメージすることができるようになりました。

先生 ここから、ニニギノミコトやコノハナサクヤヒメの話を、その弥生時代に重ねていくね。哲学者の梅原猛先生が『天皇家のふるさと日向をゆく』という本を書いておられる。この人の本がおもしろい。考古学者・歴史学者ではないので、足りない部分については、しっかりイメージをふくらませて書いてくださる。私たちは学者ではないので、こういう方の話の方が心の中にストンとおさまる。この梅原先生の説にだいたいそって話をするね。

長江から海に出て太平洋の暖流に乗ると、だいたいは鹿児島県や宮崎県の海岸に到達するそうだ。ある王族が到着すると、まずどこを目差すと思う？

次郎 追っ手の来ない山の中！

先生 そうだね。後の百済の一族も美郷町まで逃げこんだ。日本の戦いでも、源氏に破れた平家の一族は日向の山奥椎葉まで落ちのびた。中国から敵がわざわざ追いかけては来ないかもしれないけど、恐怖心が人間の行動を山へ山へとかき立てる。逃げこんだ先が、天孫降臨の地と言われる今の高千穂だった。どう？

次郎 なるほど、わかりやすいですね。

先生 そういふことを証明するものは何もないんだけど、天才たちはそうイマジネーションを働かせるんだ。その地に伝承も残っているし。

高千穂は水も豊かで稲作にも適している。多分そこで心の傷をいやしながら、新しい国作りを再び考え始めた。ニニギノミコトみたいな人がおられたのだらうと思う。中国の一族というよりキリストのように天から平和な社会を作る使命を背負わされた地球人なのだらうと思う。時がたちある程度生活が落ち着いて回りを見回すと、国を作るには狭すぎる。そこで川を下り、海に出て、この宮崎県の海岸沿の新しい国を作るに適する場所を捜し始める。適する場所とはどんな所だと

思う？

次郎 まず土地が広くて水田がいっぱい作れて、人が多く住める所。

先生 それから？

次郎 敵から攻められにくい所。

先生 そうだね。西都原古墳群のあるあのあたり一帯は、海から10K入っているし、敵からも見つけられにくい。大きな川もあり、いつでも海に出て、他のクニとも交流もしやすい理想的な場所だった。大きな地震で津波が来ても、10Kも登れば安全。おそらく、西都の町のどこかに吉野ヶ里のような環濠集落が作られたのだろうけど、今は見つかってないよね。もしかしたら、一ツ瀬川が台風かなんかで氾濫して流されてしまったのかもしれないし、町の下に今も埋もれているのかもしれない。ようやくここでコノハナサクヤヒメとニニギノミコトの出会いの話になるんだ。

次郎 昔も恋愛結婚ってあったんですか。

先生 おそらくこれは政略結婚。政略結婚というのは、地方の有力な豪族（縄紋人）の娘と結婚することで自分のクニの力を強めようとする政治的を持った結婚のこと。もしかしたら、コノハナサクヤヒメの父親がこのあたり一帯を支配していたのかもしれないね。結婚することで親族になり一体化する。この二人の間に生まれたのが、ホデリ（海幸彦）とホオリ（山幸彦）で、この海幸、山幸の物語は知っているよね。兄海幸と弟山幸はある時互いの道具を交換してみることにした。しかし、弟山幸は兄の大事な釣り針を魚に取られてなくしてしまう。兄が許してくれないので、海神（わたつみ）の宮に行って捜すことにした。そこでトヨタマヒメと出会い3年を過ごした。釣り針も見付き兄へ返したが、結局争いとなった。海幸は負けて弟の家来となった、というような内容。

ここには重要な話が隠されている。トヨタマヒメとの間に生まれたウガヤフキアエズノミコトもトヨタマヒメの妹タマヨリヒメと結婚している。梅原先生によると、やはり続けて政略結婚ということになる。海神の宮と言ったけど、ここは土着（縄紋人）の海洋族ハヤトの本拠地で、このハヤトとの絆を強固にすることで、海軍と航海術を手に入れていったのではないかというわけ。もしかしたら海幸彦も別のハヤトの養子になっていたのかもしれないね。山幸彦もウガヤフキアエズノミコトも、しっかりニニギノミコトの志を受け継いでいたんだろうね。新しい理想国を作るといー。

次郎 すごいですね。神話と言っても何だか本当の話のように感じられてくる。

先生 いよいよ神武天皇の登場だ。ウガヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメとの間には4人の子が生まれ、一番下がワカミケヌ。サノノミコト（狭野命）とも呼ばれていた。後の神武天皇です。生まれたのは今の高原町内。西都原からは随分離れていて南西の方角。今、車で走っても1時間半はかかります。どうしてこんなところまで行ったのだろう。ニニギノミコトから言えばサノノミコトは曾孫になる。100年は経過している。どうしてだと思っ？

次郎 わあ、どうしてだろう。支配領域がどんどん広がって、本拠地を移したのかな？

先生 先ほどのように海洋族のハヤトと結びつきを強めながらも、着々と支配領域を広め、もはやこの南九州全域に達したのではないかと思うよ。高原町に居を定めたということは、その地域の豪族と和睦し、何らかの策略をめぐらしていたのかもしれない。石井記念友愛社は、5年前に新しい児童養護施設「石井記念神武の家」をつくったよね。ニニギ一族の志にあやかろうとするものではないけど、理想的国家建設という広大な志の何パーセントかでも持つような子供が育てほしいという願いはこめられている。

次郎 へえ責任重大ですね。ぼくにはちょっと無理です。

先生 いよいよ成長したサノノミコトは、壮大な国家建設プロジェクトを実行に移すため、今の宮崎神宮の近くに居（皇宮屋、高千穂の宮とも言う）を構え、兄弟たちと大和の地へ向けての策をねることになる。しかし、ここでまた立ち止まって考えなければならない。国作りは、なぜ九州ではいけないのか。どう思う？

次郎 大和地方の方が日本列島の中心地だから。

先生 少なくともこの南九州では国づくりは無理と判断せざるを得ない状況が当時あったのだと思う。それは一つは火山の噴火。紀元前後に九州の活火山がかなりの大爆発を繰返したらしい。それに台風なんかの天候災害もあったと思う。特にこの宮崎は、私が子供の頃は台風銀座と言われるくらいよく台風が来ていた。当時今のように川に堤防が築いてあるわけではないので、台風が来る度に川は氾濫して荒れ狂っていたと思うよ。稲作は致命的打撃を受けるよね。今日本各地で水害が発生したり、コロナが全世界に広まったりして、地球が病み始めているように感じるけど、当時も感染症も発生したりして今以上に厳しい状況に追い込まれてていたのかもしれないね。そうだとすれば、この南九州を出ると決めたことは、このクニの未来を考えての悲壮な決意だったのかもしれない。

次郎 そうですね。サノノミコトは紀元前後頃の人なのでしょうか。

先生 多分そうだ。「神武東征」と言われるけど、今の日向市の美々津から船出して瀬戸内海を通過して大和に到着するまでに16年くらいの歳月をかけている。これも一つのナゾだよ。特に安芸や吉備には7年、8年と逗留（とうりゅう）している。もしかしたら、最初から大和をめざしていたのではないのかもしれない。理想の国づくりは、安芸でも吉備でもよかったのかもしれない。この南九州でやったように、最初は避難民を装って下手に出て、政略結婚を試みたり、理想国家論を戦わせて、取り入ろうとしたりしたのかもしれない。天孫降臨の話も、自分たちに権威をもたせるためのその説得の過程で生まれていったのかもしれない。その土地その土地には、すでに支配している豪族たちがいるからね。中国の「漢書」によると、その頃日本列島には100以上のクニがあったらしい。大阪や紀伊半島あたりでは本格的な戦いになったようだけど、兄を失うなどの試練も乗り越えようやく大和を平定。カムヤマトイワレヒコと名前を変えて、初代の神武天皇として即位する。とにかく中国大陸などのやり方とは全然違うやり方で国づくりを進めてきている。やはり母方の血、縄文の血がそうさせたのだと思う。

次郎 わあ、ありがとうございます。ぼくにはほんとうにあった話のように思えてきました。神武天皇が、中国大陸などのように武力で強引に相手を殺していくような姿勢でないところがよいですね。

先生 残念なのは、その頃まだ日本に文字がないので、神武天皇のお気持ちは全く分からないということ。しかしその行動を見ていると、なるべく戦わずに平和に国を作りたい統一したいという思いがあるように感じられるよね。その姿勢は日本人の誇りとしなければならない。

次郎 今までの話の次に古墳の話になるのですか。

先生 時間もないので、後は簡単に話すね。100以上の国を一つにまとめるという事業は簡単ではないよね。神武亡き後200年くらい、天皇で言えば何代かに渡ってほんとうに統一できるまでは、戦乱・混乱は続いたと思うよ。そして、日本列島統一の一つのシンボルとなっているのが、前方後円墳などの古墳なのだ。

奈良県の纏向（まきむく）古墳群が日本最古の前方後円墳だと言われている。3世紀初頭だ。

大和朝廷の最初の頃のお墓ではないかと言われている。この古墳がそれから6世紀末にかけて日本全国に広がっていくのだ。まず大和にできてそれが全国に広がるということは、大和の権威が広がるということで真の意味の統一国家が成立したということになる。西都原古墳群のガイドブックには、大きな古墳の場合、1000人が毎日働いて2年半かかると書いてあったけど、そういう作業ができるということは、平和な社会になったという証明にもなる。神武天皇の夢が実現できたわけだ。戦乱の時代にはそんな大きなお墓を作る暇も余裕もないよね。西都原には300以上の古墳があるけど、九州最大の古墳もある。それだけ大和朝廷から権威を認められていたということになる。なぜだと思う？

次郎 神武天皇の曾祖父のニニギノミコトがおられたところだからです。

先生 そうだ。朝廷にとって近い親族になる。政略結婚等で多くの豪族と親族関係となっていたので、それなりの権威を与えられ地域を支配した。そういう所が大和と同じような古墳を作ることを許された。そういう事だろうと思う。古墳群は西都原だけではなく、この茶臼原、隣の新富町、高鍋町、そして皇宮屋のあった宮崎市生目あたり等にもあるよね。まさに天皇のふるさと宮崎なんだ。その後も、カミナガヒメなど天皇と結婚した女性が宮崎からは何人か出ている。

次郎 大変勉強になりました。ありがとうございます。

先生 今までの話から、現代の私たちが学ぶべきところ3点あげておくれ。

- ① まず1万年以上続いた縄文時代の人々から学ぶべきこと。「八百万（やおよろず）の神」とか言うけどこの大自然に様々な神がいて、それぞれの神々を畏敬しながら、自然と共生し生きていくという感性を見習うこと。自然は決して支配できるものではない。
- ② 弥生時代の神武天皇から学ぶべきことは、やはり、血で血を洗うような凄惨な戦いによって国を統一しようとするのではなく、「和」によって平和的に平定していこうとすること。この感性は縄文人から受け継いだものだと思う。その後604年に聖徳太子が「十七条の憲法」で和の精神の大切さを説いたよね。
- ③ あの古墳を作るという行為は、戦争を放棄するシグナルではなかったかという気もする。戦争に向けるエネルギーを古墳作りに向けさせようとしたのではないかと思う。そのことで平和を維持しようとしたのではないかと思う。大和朝廷の誰かが考えだしたのだろう。古墳は平和の象徴なのだ。

我らは、日向灘の黒潮海流と共生したハヤト族の血を引き、サノノミコトの志を引き継ぐ県民であることを自覚して生きていこう。